

高齢者・妊婦の身になって

②

「助さん、格さん、行きますよ」——。高齢者疑似体験セットを装着し、杖(つえ)を手に、テレビドラマの水戸黄門になったような気分で街に出た。随行してくれたのは、体験セットの販売・レンタルを手掛ける長寿社会文化協会(東京都港区)の榊芳子さん(56)と山田さつきさん(46)。黄門さまが階段で転んだり赤信号で渡ったりしないようにに脇からサポートしてくれる。広報担当の昆布山良則さん(55)も風車の弥七よろしく、遠巻きに見守ってくださった。今回のミッションは、東京の増上寺に近い同協会本部から、

体・験・学

500円ほど先にある地下鉄大門駅まで歩いて行き、切符を買って戻ってくる。実はどんな所を歩くのか、同協会を訪問する前に下見をして、少々気後れする部分もあった。外国人観光客を含めて人通りが多く、オープンカフェで道行く人をゆっくり眺めている若い女性グループ客までいる。ところが実際に体験セットを装着して歩いて驚いた。カフェがあるはずの地点でも周りに人がいるのか、よく分からない。加齢で生じる白内障を疑似体験するゴーグルのせいで、すべてがぼけて見え、しかも視野が狭い。老人性難聴を



財布の中の小銭を見分けられない(東京都港区)

苦勞。とても周りを気にして恥ずかしがっている余裕はない。「高齢者疑似体験中」と書かれたゼッケンを背に、歩道のド真ん中を脇目も振らず歩くのみ。そうやって歩くうちに、体中にひどく熱がこもってきたのを感じた。戸外は真っ黄色に見えていたが、本当は雲一つない青空で、危険なほどに太陽が照

をよたよたと降りていくと、そこはゴーグルを付けた私にはつらい暗い世界だった。何とか券売機まで行き、路線図を見たがウワツ、料金が読み取れない。180円の切符を買うことにして財布を開けたが、どれが百円玉か、全く分からない。そもそも特殊な手袋のせいで硬貨をつかみ取れない。だれか後ろでイライラしていないかと焦れば焦るほど硬貨は逃げていく。

榊さんが「本当に買わなくていいので最低料金に満たない170円まで入れてください」と言う。うーん、どれが十円玉だつう。思い切っ

狭い視野、500円歩くのに苦勞

切符購入、硬貨がつかめない

体験する耳栓もしているから、カフェのことなど全く気にならなかった。そもそも全身のサポートと重りのせいで前に進むのもひと

りつけていたようだ。「ここから階段を降りていきます。段差に気をつけて」。山田さんがはっきり耳元で話してくれた。地下鉄駅に通じる階段

て入れてみると券売機から切符と小銭がジャラジャラ出てきた。しくじった、最後に入れた硬貨が十円玉ではなかったようだ。

ひと言

ド真ん中を歩くお年寄りのことを自分勝手と思うことがあった。いけない。もっと優しくならなきゃ……。